

## 世襲された職業の重み

今から20年ほど昔、イタリヤを旅行した時の事です。同行の友人から靴を買ふのにぜひ付き合ってくれと言はれ、一緒に靴屋を訪ねました。靴屋の主人は友人の足の寸法を測り、靴の型の希望を聞くと、山のやうに積まれた箱の中から1足の靴を取り出して来て友人に示したのです。友人はその靴が大層気に入った様子で、いそいそと片方の足を入れてみるや「これはいい。足にぴったりだ。この靴を貰ふ」と言ひました。すると靴屋の主人は「両足とも履いてみないといけない」と言ふ。そこで友人は両足に靴を履いて2、3歩歩いてみたが、靴屋の主人は友人を椅子に掛けさせるとそこにしゃがみ込み、友人の足を靴の上からあちこち何度となく押したり撫でたりしてゐたが、順を横に振って「これは足に合つてゐない」と言ふのです。

友人は「いや。よく合つてゐる。この靴を貰ふよ」と言ったのですが、主人は聞き入れません。そしてまた箱の山を1つ1つ丹念に調べ、別の1足を取り出して来て友人に履き換へさせました。すると友人は「ああこの方がいい。まるで足に吸い着いたやうにぴったりだ」と言って大喜びです。その友人の喜ぶ顔を見て、靴屋の主人はいかにも満足さうに頷いてゐましたが、私はその顔を見てゐて「これが本当の靴屋といふ

ものだな」と思ったものです。それで私も靴を買ふ気になったのですが、その時の快い雰囲気は20年後の今も私の心の中に鮮かに残っていません。

思ふに、このやうな靴屋は、決して1代や2代で出来るものではありません。親から子、子から孫へと何代も掛つて築き上げられるものでせう。私はこの時、世襲された職業の重みといふものをつくづくと感じたものです。

わが国では、明治維新により職業の世襲制が廃止されました。何が何でも親の職業を受け継がなければならないといふそれまでの制度は私も賛成できませんが、明治以後の職業選択の自由にも余りな行き過ぎがあつて、素直に現状を喜ぶ気になれません。隣の芝生は美しく見えるものです。そのやうに、他人の職業はその良い所だけが見えて悪い面は見えないのです。それで「こんなに苦勞の多い仕事はわしの代限りで結構。お前はもっと良い職業を選べ」と言ふわけです。自分の職業に誇りを有ち、その仕事の大切さを堂々とわが子に語る父親が今は少なくなつてしまひました。